

平成二十年度 入学試験問題

国語（理系）

一〇〇点満点

△配点は、学生募集要項に記載のとおり。▽

（注意）

- 一、問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
- 二、問題冊子は1ページから10ページまでの10ページ、解答冊子は表紙のほかに12ページ（うち8ページは下書き用）ある。
- 三、問題は全部で3題ある。全問解答すること。
- 四、解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
- 五、筆答開始後、解答冊子の表紙所定欄に学部名・受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
- 六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
- 七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。
- 八、問題冊子は持ち帰ってもよいが、解答冊子は持ち帰ってはならない。

次の文を読んで、後の問に答えよ。(四〇点)

「教養というものが持つ魅力の一つに、私たちを自由にしてくれる働きがあると思う。もつれている思考を整理してくれる快感もあるだろう。《演劇的知》という、耳慣れない教養にもそれがある。《演劇的知》とは広く演劇にまつわる教養ととらえてもらってかまわない。たんてきにいえばそれは「私たちを無意識に縛っているものに気づいていく教養」である。きわめて実践的であるところに特徴がある。」

私は舞台の演出家として、はいゆうの身体や古今のテキストを通して、人間のたたずまいや現代社会の様相をとらえる試みを日々の仕事としている。また年間の相当な日数を、学生や一般の市民に向けた演劇のワークショップにあてている。演劇におけるワークショップとは、この場合、体験型の講義のことである。私は、そうしたフィールドワークを通じて現代日本人の身体や社会を見つめている、といえるかもしれない。

私たちを縛っているもの。それはまず、自分の身体である。私たちは好むと好まざるとにかかわらず、自分の性別や容姿、さまざまな欲望も含めた生理状態と一生付き合わなければならない。身体はまた、生まれた地域や時代、家庭環境を誕生の段階で選ぶことができない。言語や習慣も身体を縛っている大きな要素である。

私たちは自分の身体をどれくらい知っているだろうか。《演劇的知》の初歩的な問いかけは以下のようなものだ。「ごはんを食べるとき、一体何回噛むのか」、「横断歩道を渡るとき、どちらの脚から歩き始めるのか」、「面白いと思ったとき、どのような反応をするのか」、「そもそもどういふものを面白いと思うのか」……。すなわち身近なしぐさ・行動や思考を把握することである。

ために「靴下の着脱」を題材にした、次のようなトレーニングを紹介したい。まず靴下を履いたり脱いだりする。いつも通りの一連の動作である。次に靴下なしでそのしぐさをおこなう。あらためて膝と胴体の位置、指や腕の動きが認識されるのではないかと思う。その上で、昨晚靴下を脱いだ状況、今朝靴下を履いた状況を、靴下なしで再現してみる。わからなくなった

ら実際に靴下を使って確認する。十分な自己観察ののち、数人の人が見ている前でそれを再現してもらう。私の経験では、ほとんどの人が忠実に再現できない。

着脱のしぐさそのものが違うこともあるが、多くの場合忠実でないのは、視線である。大抵の人は、靴下を凝視してしまう。日ごろ着脱の際、自分がどこに目をやっているのか意識している人は少ない。実際はそれほど熱心に靴下を見ているわけではないのである。他の人に見られることで、視線の置き場所が普段と違ってくる。人前で再現できないものは、観察が不足していると考えられる。

意味合いを広げるために、もう少し踏み込んでみよう。靴下の着脱といった日常的なしぐさは、ほぼ無意識に繰り返されている。またそうでなければ私たちの生活は煩瑣^(ウ)でしようがない。であるからこそ、視線に無頓着なのだ。しかし、あらためて注目してみると、私たちはそこに、身体に埋め込まれた歴史ともいえるものを発見する。初めて自力で靴下を履いた日のことをおぼえているだろうか。それまでは親に履かせてもらっていたのが、ある日自分でできるようになる。周囲の喜びを通じて、大きな感動があったはずだ。が、私たちはそれをすでに忘れている。

私たちの身体は、そうした無数の動作と、感動の記憶の堆積である。《演劇的知》の一つは自分の身体の歴史を掘り返し、埋もれている感覚を再確認し、それらにかかわる心の動きを思い起こすことにある。いわば発掘を通じた、身体との対話である。身体への感動は実在感の基礎であつて、そこから尊厳も発生する。その感動を忘却することは、自己の喪失感に、ひいては他者への思いやりのなさや周囲への無配慮につながると考えられる。

ホスピタリティに満ち、物質的に豊かなわが国にあつて、自殺やリストカットなど自傷行為の報告はまじきよにいとまがない。他の国と比べて驚くほど多いという話も聞く。近年問題になっているうつ病やひきこもりも無関係ではないだろう。議論の際、往々にして他者とのコミュニケーション障害が問題になるが、私は他者との対話以前に、自己との、つまり、身体との対話が多く現代日本人には決定的に欠けているのではないかと感じている。演劇のトレーニングの中には、それを補填^(オ)する多くの方法や教養があふれている。

(安田雅弘《演劇的知》について「より」)

問一 傍線部(ア)く(オ)のひらがなを漢字に、漢字をひらがなに改めよ。

問二 傍線部(1)について、「観察が不足している」ものを「人前で再現できない」のはなぜか、簡潔に説明せよ。

問三 傍線部(2)において、筆者は日常的な動作が習得されるプロセスとの関わりで「身体に埋め込まれた歴史」について述べているが、その意味するところを説明せよ。

問四 本文冒頭の波線部分で、筆者は「私たちが自由にしてくれる」という「教養」の働きについて述べている。筆者の考えを簡潔に説明せよ。

次の文を読んで、後の問に答えよ。(二〇点)

書画骨董の真偽ということは、むずかしい。おそらく、どんな目きき、どんな鑑定家だって、年に何回かの誤りを犯しているに相違ない。目がきき、視野がひろければ、それだけ、初心の時とはまた違った、念入りの誤りを犯しやすいのも是非なこと、いつも石橋を渡るつもりでいたら、常識的な、まちがいないものは拾うだろうが、その代り、その作者の異色ある作品が犠牲にされる虞れ、なきにしもあらずである。そして、作者の傑作というのは、案外、こういった作品に多いものである。大胆だと偽物を掴み、小心だと本物を逃す。どっちみち、誤りは仕方ないとしても、本物が偽物にされるよりは、偽物が本物にされる方がまだしも明るい感じた。よし、いったん偽物が本物にされても、いつかは見破られる時も来ようが、偽物にされた本物は、おそらく一生うかびあがれまい。

もともと、本物・偽物は、同格として同じ比重であるべき筈なのに、どうしたわけか、偽物という言葉の方が、重くて、圧倒的で、決定的な何ものかを持っているような気がしてならない。たとえば、私が自分の蒐集品で、やや疑問に思っているようなものを、ひとから本物だと言われても、これは私に軽くしかふれない。それに反し、私がかなり自信を持っているようなものでも、ひとから偽物だと言われると、その一言は、決定的な、破壊的な力を持っているようだ。否定の方が強くて、権威的であるというのは合点いかないが、これはどうも現実だから仕方ない。大声の方が耳に入りやすいようなものだろうか。

小林古径画伯がまだ存命中のとき、私の友人で美術研究家のS君が、浜松の蒐集家のところで、古径の作品を見せられた。古径好きのS君にはそれがどうしても納得ゆかない。正直な人だから、自分の思うままを披瀝したところ、蒐集家は、画伯から直接に求めたわけではないが、信用ある人を通したのだから、絶対に間違いない筈だと主張した。そこで、場面がやや険悪になり、とうとう、作者自身に見てもらったことになった。友人がその使者として、問題の作品をうやうやしく差出したところ、古径先生は、「まことにおはずかしいが、わたくしのかいたものです」と、一言いわれたそうである。

だから、この作品は真正銘の本物であるが、鑑定家はこれを偽と思い、作者自身は、不出来の真作だと告白したわけで、要するに、出来の悪い本物と、出来のいい偽物は入りみだれているので、せまい目で見られると、出来の悪い本物は、偽物にされてしまう。そんなもの、本物でも偽物と同じだ、という考え方も成り立つ。あの古径さんの謙虚な言葉は、それをやや肯定しているともいえよう。しかし、本物はあくまで本物だとしなければ筋がとおらない。

偽物は書画骨董の世界ばかりでなく、私たちの日常生活の中にも、ゴロゴロころがっている。たとえば、果物にしたところ
で。——私は白桃など果物のなかで一ばん尊重し、日に、一個、二個をあがな購あがない、食うのを楽しみにしてきたのに、この一、二年
というもの、味も香も劣つて、すっかり別物になりさがつたのは残念でならない。ひとり白桃にかぎらず、このことは、ナシ
やリンゴやブドウについても言えそうだ。形態だけは本物そっくりでも、中身、つまり、味と香は偽物なのである。これは筆
法だけが似ていて、精神のない書画と同じであろう。

だから、私は以上のような一流品でなく、この頃は、二流品をかうことにしている。白桃よりか、名前は落ちるだろうけれど、ほんの短期間しか姿を見せない、あの巴旦杏はたんきょうや、杏子あんずなど、安ものの方が、どんなに生きのいい、正直な味をもっているか知れない。これは私が子供の頃に食べたのと全く同じ風味だ。かの有名なマツタケにしても、人目につかないシメジ（ウ）などの方がよっぽどキノコそのものである。総じて、一流品は墮落してしまつたのに、二流品、三流品は、その本来の矜持きやうぢを保っている。私は偽物の一流品よりは、二流品、三流品でも、本物の方が好きだ。そして、書画骨董でも、食物でも、ひよっとしたら、人間様でも、ここに掘出しのコツがあると思つている。

(青柳瑞穂「真偽のむずかしさ」)

問一 傍線部(ア)は、どういふことをいつているのか、説明せよ。

問二 傍線部(イ)は、どのような気持ちから発せられたと筆者は考えているのか、説明せよ。

問三 傍線部(ウ)は、どういふことをいつているのか、説明せよ。

三

次の文を読んで、後の問に答えよ。(三〇点)

昔、おとこ女あひすみけり。齡としなどもさかりにて、よろづ行く末のことまで浅からず契りつつあり経るに、この夫、思ひのほかにはかなくなりにつけり。その後、涙(1)にしづみて、あるにもあらずおぼえけるを、我も我もとねんごろにいどみいふ人ありけれど、いかに*も許さざりけり。これを聞くにつけても、亡きかげをのみ心にかけてつ時のまも忘るるひまなくて、終に命を失ひてけり。その屍かばねは石になりにつける。

(2) ことわりや契りしことのかたければつひには石となりにつけるかな

(3) この石をばその里の人々「望夫石」とぞいひける。

ひとすぢに思ひとりけむ心のありけむありがたさもこの世の人には似ざりけり。

(『唐物語』より)

注(*)

あひすみけり||結婚していた

いどみいふ||求婚する

いかに||決して

問一 傍線部(1)を、主語を明らかにして、現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)の和歌を、適宜ことばを補いながら、現代語訳せよ。

問三 傍線部(3)を、適宜ことばを補いながら、現代語訳せよ。

問題は、このページで終わりである。